

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02285

研究課題名(和文)日本の七宝業の技法と製作環境に関する研究-明治期の並河靖之の七宝業を中心に

研究課題名(英文)Technique and Manufacturing of Japanese Shippo Works, Study on Yasuyuki Namikawa's Cloisonne and Enamel Works.

研究代表者

武藤 夕佳里(MUTO, Yukari)

京都造形芸術大学・日本庭園・歴史遺産研究センター・客員研究員

研究者番号：80388206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：「日本の七宝業の技法と製作環境を明らかとする」を目的に明治期の京都で展開された帝室技芸員・並河靖之(1863～1927年)の七宝業に着目し研究をした。日本の七宝業を明らかにするためには技法と製作環境の解明が重要であると考え、研究手法には文献研究のみならず、作品及び七宝釉薬や下画顔料の科学分析調査を取り入れた。当時の七宝業が時代の転換期に技術開発により興隆し、文化的で独創的であったことが分かった。日本の七宝研究は、その成果を諸分野や海外研究者たちと共有することにより、新たな事実を導き出すことができ、新規性ある日本独自の研究の確立ができると確信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代七宝は、美術史では殖産興業による輸出工芸、近代史では近代化策の機械制製作や大量生産品と目され、正当な評価を得られず、学術的な七宝研究への関心を遠ざけてきた。その理由として、海外の需要で輸出され、国内に七宝遺例が少なく、その技法が基本的には在来技法ではなく、幕末期の尾張にて開発した新興産業であったことも要因にあると考える。

七宝は19世紀の万国博覧会を通じて、日本の技術力や文化性を世界に知らしめる重要な役割を果たしたが、七宝研究はその実像をみる視点を欠いてきた。だが、本研究は七宝技法や製作環境に着眼した独自の視点があり、海外研究にも影響を与え、先端的で体系的な新たな七宝研究となった。

研究成果の概要(英文)：Namikawa Yasuyuki(1845-1927)from Kyoto was an internationally renowned Japanese cloisonne artist and manufacturing company. Imperial Craftsman (1896). "Namikawa Yasuyuki Shippo shiryō" I investigated "Namikawa-ke Monjo, both in the collection of Namikawa Yasuyuki Cloisonne Museum. The "Shippo shiryō" complex is a designated National Registered Tangible Cultural Property, "Monjo" comprises written materials not included in "Shiryō" Investigation of the black glaze of Namikawa Cloisonne carried out in collaboration with Tokyo Gakugei University by non-invasive scientific research of original objects resulted in a thorough understanding of the black glaze up to the amount of chemicals used for individual objects' glaze. Comparing the data gained from scientific examination of Namikawa susuke (Tokyo) and Owari Cloisonne black glazes. A Japanese Shippo study entered the new stage by this study. I got the important viewpoint which inspects a Japanese Shippo Works.

研究分野：工芸史、近代史

キーワード：並河靖之 並河七宝 製作環境 釉薬 技芸 博覧会 明治工芸 新興産業

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代の七宝業に関する学術的な研究は、長らく積極的に行われてきた状況にはなかった。やきものや金工、漆などの他の工芸については、生業の変遷を歴史的に検証し、工芸史や美術史、経済史、歴史学などからの学術的な研究が進んできたが、七宝は手つかずと言っても過言ではない。その一因として、明治期の七宝業が海外需要に呼応して輸出され、国内に残る七宝遺例が少ない、研究の史資料や先行研究に限られるなどの理由がある。さらに近代七宝が在来技法を踏襲したのではなく、幕末期の尾張にて梶常吉が技法を開発し新興する産業で、歴史が浅く、伝統的要素が希薄であったことも要因にあると考える。

日本の近代七宝は、19世紀の万国博覧会を通じて、日本の技術力や文化性を世界に知らしめる重要な役割を果たしたが、その七宝業がどの様に成し遂げられたのかをみる視点を欠いてきた。明治期の七宝は殖産興業政策により外国向けに作られた輸出製品という評価にとどまり、大正末から昭和初期には斜陽産業なるなどもあり、学術的な七宝研究への関心を遠ざけてきた。

(2) 先にも触れたが国内の七宝研究はそもそも低調で、明治期にみる研究は近世以前の文化史や美術史ほか、同時代の博覧会や産物などの報告書などが主で、日本の七宝業の全体像をみる史資料や研究は乏しい。そのため吉村元雄『七宝』(1966年 マリア書房)は、近世以前の七宝が主であるが研究史の嚆矢といえ、その後に鈴木規夫・榊原悟『日本の七宝』(1979年 マリア書房)により近代七宝まで範囲が広がり、吉田光邦・中原顯二『中原哲泉 京七宝文様集』(1981年 淡交社)などが続く。その後も大きな進展はなく、2000年代に入り国内に近代七宝に特化した展示施設が開館し七宝へ着目が向けられてようになった。京都の清水三年坂美術館(2001年)や並河靖之七宝記念館(2003年)、愛知のあま市七宝焼アートヴィレッジ(2004年)などである。

しかしこの間海外では、豊富な明治の七宝の史資料を基に、日本の七宝研究が刊行された。ロウレンス・A・コーベン&ドロシー・C・フェスター『JAPANESE CLOISONNÉ』(1982年 ウエザヒル社)、『THE NASSER D. KHALILI COLLECTION OF JAPANESE ART 明治の宝 MEIJI NO TAKARA TREASURES OF IMPERIAL JAPAN ENAMEL』(1994年 THE KIBO FOUNDATION)、『JAPANESE CLOISONNÉ』(2006年 V&A 博物館)ほかである。作品画像も多く、日本の七宝研究もいち早く取り入れ、さらに当地における独自の七宝研究による成果がみられた。

国内では2005年の本国際博覧会開催を契機に明治の美術、工芸への関心が高まり、それに伴い七宝に関する刊行物が増える。村田如理『京七宝並河靖之作品集』(2008年 淡交社)、『七宝』(2009年 INAX 出版)、『明治の細密工芸 驚異の超絶技巧!』(2014年 平凡社) 各種展覧会図録などであるが、作品紹介が中心で、作者や技法に関する考察も一部にみられるが、断片的なものに留まってきた。また、多くの場合、明治の七宝を評価する際には、日本にての七宝研究の空白を海外の研究に求め、深く検証することなく受け入れた考察や研究が行われていた。

一方、尾張七宝の産地であるあま市七宝焼アートヴィレッジでは、『尾張七宝』(2006年)、『林小伝治家文書1』(2008年)ほか、郷土の産業史を掘り起こす地道な活動を重ね、並河家の寄付により設立した並河靖之七宝記念館では、『並河靖之七宝記念館館蔵品図録 七宝』(2010年)、『並河靖之七宝記念館図録 七宝の美空間 庭園と建物』(2012年)にて、所蔵品や職住一体の邸宅に関する研究成果を刊行し、技法や製作過程も視野に入れた研究が始められていく。だが、先ずはそれぞれの産地や作者の特性を著す研究が優先となってきた。

(3) 七宝研究の機運が高まって、海外の先行研究を追従するものとなりがちで、国内独自の研究視座が弱く、明治の七宝業の全体をみる体系的な研究への展開はできていない。そのため研究者は、科学研究費萌芽研究課題番号 18652069「明治期における技芸(工芸)技術活用による産業創生に関する研究 京都七宝を中心に」(2006~2008年度)、科学研究費基盤研究(C)課題番号 22520696「明治期の技芸技術活用による産業創生 京都七宝にみる産業クラスターの萌芽」(2010~2012年度)にて、近代史の中に日本の七宝業をみる研究に着手した。

日本の七宝業の歴史的な考察を含めた全体像をみるため、先行研究を踏まえつつも工芸史や美術史に留まらない新たな視点が必要であると考え、新たな七宝研究と日本の七宝史の確立をめざし近代技芸技術研究会を開催し諸分野と共同研究を重ね、並河家文書(学習院大学ほか)や七宝釉薬の科学分析調査(東京学芸大学ほか)などを行ってきた。

日本の七宝の在外調査についても、2008年度・2009年度サントリー文化財団人文科学、社会科学に関する研究助成「明治期の技芸(工芸)技術活用によって創出された京都七宝が果たした役割に関する共同研究」(研究代表者:武藤夕佳里)にて、英国のV&A博物館、国立リバプール博物館、アシュモリーアン博物館の協力を得て当地で調査を行った。

また、明治期の京都における七宝の製作環境や人的交流をみるため、京都の七宝業の産地となった三條白川、岡崎、南禅寺界隈の同時代の動向に着目し、当地が政財界人や近代数寄者の別荘群でもあったため、近代庭園研究会に参加し庭園や建築、文芸など諸分野の知見を七宝研究に取り入れている。

これらの研究成果の一端は『平成 22-24 年度 科学研究費基盤研究(C)明治期の技芸技術(工芸)活用による産業創生 京都七宝にみる産業クラスターの萌芽』(2013)とした。

2. 研究の目的

日本の七宝業の技法と製作環境について、明治期の京都で展開された帝室技芸員・並河靖之(1863~1927年)の七宝業を中心に明らかとする。並河は明治維新後に七宝業を起業し、並河七宝の優れた製品性を通じて、日本の技術力や創造性が成熟した文化を背景に創出されたものであり、日本のものづくりが芸術性高いものであるとの新たな認識を世界に知らしめた。

近代の七宝業は明治期の日本において重要な位置を占めたが、美術史や工芸史においても研究は進んでおらず、近代七宝の全容は明らかとはなっていない。そのため、「並河家文書」(並河靖之七宝記念館蔵)の研究により、新たな事実を掘り起して近代の七宝業の技法と製作環境を浮かび上がらせ、日本の七宝史を工芸史や美術史、近代史の中に位置づけることを目的とする。

日本独自の七宝研究を深めることにより、海外研究の先行研究との相乗効果が期待され、新たな事実を持って体系的な日本の七宝研究を確立していくことができると考える。

3. 研究の方法

(1) 各種の文書史料である「並河家文書」の調査や翻刻、解析、考察を研究会(研究代表者が開催する近代技芸技術研究会)にて順次すすめる。研究者は並河靖之七宝記念館(以下、記念館)の協力を得て、研究会にて記念館の所蔵品の内容を検証し、史料的な価値を見出すことができるものを「並河家文書」と位置づけた。七宝業の第一人者ある並河靖之に関する多岐にわたる「並河家文書」の調査研究は、従来の七宝研究のみならず、工芸史や美術史においても貴重な取り組みであり、近代史においても新たな知見を得ることが期待できた。

記念館は、七宝、下画、道具、釉薬など国登録有形文化財「並河靖之七宝資料」(1662点)を有し、その他に記録簿や書状、古写真、賞状・メダルほか、がある。「並河家文書」はその他のうち、主に記録簿や書状で、並河家の家内や七宝業に関わる記録簿や芳名帳、各種博覧会の賞状、各職務に関わる任命状、書簡類の『貼り交ぜ屏風』である。

明治40年(1907)から大正10年(1921)に至る日記10冊、諸届の写しや年賀状の名簿、店の運営に関わる記録簿など11冊、並河店を訪れた外国人訪問者が署名した『芳名帳』が2冊(『Namikawa: Guest List』(1892~1903年)、『Namikawa Visitors Book』(1904~1930年))、『貼り交ぜ屏風』が8隻である。着目したには『明治四十年日記従末一月並河』に始まる10冊の日記(以下、『家日記』)と『明治四十一年十一月日誌並河店』(以下、『店日誌』)、および2冊の『芳名帳』である。既に『店日誌』の記載期間(明治41年11月から翌年10月)に対応する『家日記』と『芳名帳』、『貼り交ぜ屏風』の翻刻を行い、内容の照らし合わせや情報を複合的に捉えることが可能になることが分ってきた。

さらなる翻刻を進め、既に翻刻を終えた史料についてはそれぞれに人名、事項について整理する。『芳名帳』は、人物の特定に関わる外国人旅行者の記録や紀行文などの資料収集を行い、海外研究者も交えた研究会で考察する。『店日誌』と『家日記』は、翻刻を進め、翻刻を終えた一部の年限については詳しい解析を行い、事業、七宝技術、交友等に関する事項について整理する。

(2) 文献史料の研究に加え、七宝や釉薬資料、下画などの科学分析調査を取り入れる。研究を客観的な成果を用いて伝える事が可能となり、より多くの人々や諸分野からの七宝研究の歩み寄りを促すものと考えている。これまでの七宝釉薬の科学分析調査により、並河七宝の黒色釉薬の元素の解明が進み、従来、単一黒色と考えられていた釉薬が、実は6種に分類されることを客観的な成果を持って提示し、次への研究への足がかりとなった。

七宝の下画と釉薬資料(粉末釉薬とその焼成見本)については、並河家文書の内容を裏付ける重要な要素となるため、科学分析調査を含めた調査を行う。下画の中には七宝の注文者に関する記載があり、釉薬資料は全色に墨書きがあるため情報の整理し検証する。使用された顔料や絵画方を解き明かし、「並河家文書」の史料にみる人物交流や材料調達を始めとした記載内容の裏づけとしたいと考えている。

この他七宝技法や製作環境の検証のため、他地域の七宝製作についても、文献資料、古写真などの資料収集をし、情報収集のため関連の展示や展覧会などの視察も行う。

4. 研究成果

(1) 2016年度は先ず、『平成22-24年度 科学研究費基盤研究(C)明治期の技芸技術(工芸)活用による産業創生 京都七宝にみる産業クラスターの萌芽』(2013)の成果から、「並河家文書」や七宝釉薬の研究について、研究会にて改めて各専門家と検証をおこなった。翻刻したものは解析を進め、さらに数種の史資料を横断的、複合的に検証、解析することにより、「並河家文書」に内在する事実をより明らかに読み取ることが可能になると考え、史資料にみる人物名の抽出に着手した。未翻刻の史資料についても、優先順位を検討し翻刻に着手した。

明治時代の七宝の製作技法を解き明かすことを目的に並河七宝の七宝釉薬の科学分析調査を行ってきているが、あわせて、製作に関わる道具資料についても東京学芸大学とともに調査に着手し、製作工程についてより具体的に検証する際の資料となるよう整理していくこととした。下画に使用された着彩顔料を対象とした調査に着手した。

明治期の七宝業に関わる史資料の収集の手掛かりとして、近代庭園研究会、国際近代陶磁研究会、家具道具室内史学会の研究会、東京藝術大学にての肥前陶磁器の分析科学に関する研究会ほかに参加した。さらに、同時代に活躍した皇室技芸員・湊川惣助(1864～1910年)については、各所収者のご厚意により新たな七宝資料や史資料の調査を行うことができた。

(2) 2017年度は引き続き「並河家文書」の翻刻や解析をすすめた。研究会では翻刻史料の横断的、複合的に検証と考察を行い、内容を多角的な視点で読み取り、明らかとすることに取り組んだ。家具道具室内史学会、日本産業技術史学会や International symposium() The Japanese Garden Intensive Seminar Plus in Kyoto 2017 The Cosmopolitan Japanese Garden and Ideas ほかにて、これまで成果と取り組みの一端を報告した。

七宝釉薬の科学分析調査については、研究会を開催し東京学芸大学と共にこれまでの七宝釉薬の調査をさらに進めるため、新たに『七宝資料集7 塚本貝助家文書』あま市七宝焼アートヴィレッジ(2013年)に収録された、明治期の釉薬の調査に関する尾張七宝の塚本貝助(1828～1897年)に関連する史料である「明治二十三年 元調法簿 寅四月廿五」(1890年)の翻刻や英文で著述された高松豊吉“ON JAPANESE PIGMENTS”(1878年)の翻訳に着手した。

これまでの七宝釉薬の科学分析データと史料により、具体的な検証材料が得られ、当時の製作技法の解明に可能性が広がった。下画に使用された着彩顔料を対象とした調査も継続した。

史資料研究をさらに効果的にし、学術研究を深めるため文化財保存修復学会、日本産業技術史学会、近代庭園研究会、国際近代陶磁研究会、家具道具室内史学会、国際日本文化研究センターほかの研究会に参加した。

(3) 2018年度は「並河家文書」ほかの史資料の翻刻や解析、横断的な整理、科学分析調査との総合的検証を研究会にて継続した。東京学芸大学とは、高松豊吉“ON JAPANESE PIGMENTS”(1878年)や「明治二十三年 元調法簿 寅四月廿五」(1890年)の内容と、明治期の七宝釉薬の分析データの検証と考察及び大正期の勲章資料の釉薬の調査などを行った。

新たに奈良女子大学が所蔵する正倉院模造宝物の大正期に製作された黄金瑠璃細背十二稜鏡の材料について、同大学、元興寺元興寺文化財研究所、東京学芸大学とともに調査を進めた。

その研究成果の一端を日本産業技術史学会、日本文化財科学会にて報告した。アメリカ、イギリス、ドイツの七宝研究者および、19世紀の英文学に見る日本観に関する日本の研究者と、それぞれに研究交流をする機会を得て、海外研究および異分野交流の重要性を再認識した。

(4) 2019年度は引き続き主に史資料の収集を行い検証と考察を重ねた。東京国立博物館資料室、東京文化財研究所ほか、各種展覧会視察を行い、七宝業に関わる製作技法や環境について、やきものや絵画、工芸、万博など範囲を広げ行った。

科学分析調査については、あま市七宝焼アートヴィレッジが所蔵する塚本貝助家の七宝釉薬資料について、同館および東京学芸大学と調査にも着手した。悉皆調査のうち釉薬見本約60点に科学分析調査を行い、基本的な釉薬原料は、「塚本貝助家文書」にみる主要三原料と一致しており釉薬見本に含まれる元素と発色の関係性を特定する成果を得て、一端を文化財保存修復学会にて発表した。

海外研究者の交流は、今年度は個別ではなく、イギリス、ドイツの七宝研究者と英文学の日本人研究者らと研究会の機会を得て、各自の研究内容など情報交換を行った。海外では七宝の悉皆調査は進んでいるが、過去の日本の七宝研究を基に自国の研究を重ねており、日本の最新研究の共有が中々進んでいない。異分野の史料調査が日本の七宝業をみる新たな視点になりうるなど、相互の研究協力の必要を実感した。

さらに、著述の機会を得て、武藤夕佳里「新興産業としての七宝と万博 技芸と技術と近代工芸」(佐野真由子編『万博学 万国博覧会という、世界を把握する方法』思文閣出版2020年7月刊行予定)に、本研究の成果の一端をまとめた。

明治期の近代七宝は、美術史では殖産興業による輸出工芸、近代史では近代化策の機械製作や大量生産とみなされ正当な評価を得られず、七宝研究はこれまで重視されてこなかった。だが、この研究活動を通じて、明治期の七宝業を積極的に評価するためには、製作技法と製作環境を明らかにすることは重要で、それにより時代の転換期に興隆した七宝業は、民間による技術開発、であり、文化的で独創的なものであった事を明らかにすることができる、手ごたえを得た。

七宝の作品や史資料研究に留まらず、そこで得た成果を諸分野の専門家や海外研究者たちと共有し、改めて日本の七宝業を検証する視点が一層必要であり、研究の広がりにより新たな事実を導き出していくことができるといえ、新規性ある日本の七宝研究の確立ができると確信した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 六車美保、武藤夕佳里、新免歳靖、山田卓司、二宮修治	4. 巻
2. 論文標題 奈良女子大学所蔵正倉院模造宝物黄金瑠璃鈿背十二稜鏡の材料とその製作背景の研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 362-363
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新免歳靖、武藤夕佳里、高橋佳久、小林弘昌ほか	4. 巻
2. 論文標題 明治期の七宝製作技法 塚本貝助家文書に見る技法と勲章釉薬の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化財保存修復学会第40回大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 202-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤夕佳里、新免歳靖、高橋佳久、長沼暦	4. 巻
2. 論文標題 “ON JAPANESE PIGMENTS” (高松豊吉 1878年)にみる並河七宝の釉薬	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本産業技術史学会第34回年会講演要旨集	6. 最初と最後の頁 35-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤夕佳里	4. 巻 9
2. 論文標題 「並河家文書」にみる「並河七宝」への憧れ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 家具道具室内史学会誌 第9号	6. 最初と最後の頁 108-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤夕佳里	4. 巻 33
2. 論文標題 明治期の七宝業の製作環境について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本産業技術史学会33回年会要旨集	6. 最初と最後の頁 18 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋佳久、武藤夕佳里、新免歳靖、小林弘昌、二宮修治	4. 巻
2. 論文標題 尾張七宝の名工・塚本貝助家伝来の七宝釉薬に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 74-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高橋佳久、武藤夕佳里、新免歳靖、小林弘昌、二宮修治
2. 発表標題 尾張七宝の名工・塚本貝助家伝来の七宝釉薬に関する研究
3. 学会等名 文化財保存修復学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 六車美保、武藤夕佳里、新免歳靖、山田卓司、二宮修治
2. 発表標題 奈良女子大学所蔵正倉院模造宝物黄金瑠璃紺背十二稜鏡の材料とその製作背景の研究
3. 学会等名 日本文化財科学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新免歳靖、武藤夕佳里、高橋佳久、小林弘昌ほか
2. 発表標題 明治期の七宝製作技法 塚本貝助家文書に見る技法と勲章釉薬の検討
3. 学会等名 文化財保存修復学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤夕佳里、新免歳靖、高橋佳久、長沼暦
2. 発表標題 “ON JAPANESE PIGMENTS” (高松豊吉 1878年)にみる並河七宝の釉薬
3. 学会等名 日本産業技術史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤夕佳里
2. 発表標題 「並河家文書」にみる「並河七宝」への憧れ
3. 学会等名 家具道具室内史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤夕佳里
2. 発表標題 明治期の七宝業の製作環境について
3. 学会等名 日本産業技術史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 新免歳靖、武藤夕佳里、小川絢子、三浦麻衣子、長沼暦、二宮修治
2. 発表標題 並河七宝の色釉薬のグラデーションにみる近代の釉薬技法
3. 学会等名 第38回文化財保存修復学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 佐野真由子、井上さつき、武藤夕佳里、沓名貴彦、青木美由紀、関根仁、岩田泰、寺本敬子、増山一成、白山眞理、執行昭彦、森誠一郎、岸田匡平、E・G・カバルフィン、市川文彦、清水章、五月女賢司、牧原出、有賀暢迪、飯田豊、君島彩子、増田斎、井上章一、橋爪紳也、神田孝治、石川敦子、清水寛之、D・アンダーソン、鷓飼敦子、ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 556
3. 書名 万博学 万国博覧会という、世界を把握する方法	

1. 著者名 編著 尼崎博正、麓和善、矢ヶ崎善太郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 352
3. 書名 武藤夕佳里「明治のニッポンにて、外国人がであった chanoyu と庭園」『庭と建築の煎茶文化』	

1. 著者名 武藤夕佳里	4. 発行年 2016年
2. 出版社 京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター	5. 総ページ数 124
3. 書名 「「玄琢山荘」および「玄琢庵」の庭園」『庭園学講座22 日本庭園と理想郷』	

1. 著者名 武藤夕佳里	4. 発行年 2016年
2. 出版社 京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター	5. 総ページ数 124
3. 書名 「河井寛次郎記念館の庭」 『庭園学講座22 日本庭園と理想郷』	

1. 著者名 武藤夕佳里	4. 発行年 2016年
2. 出版社 京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター	5. 総ページ数 124
3. 書名 「清水六兵衛邸の庭園」 『庭園学講座22 日本庭園と理想郷』	

1. 著者名 武藤夕佳里	4. 発行年 2017年
2. 出版社 毎日新聞社	5. 総ページ数 247
3. 書名 「並河七宝」の製作環境 「店」と「工場」 『並河靖之七宝展 明治七宝の誘惑 透明な黒の感性』	

1. 著者名 武藤夕佳里	4. 発行年 2017年
2. 出版社 毎日新聞社	5. 総ページ数 247
3. 書名 「並河七宝」の表現と技法 『並河靖之七宝展 明治七宝の誘惑 透明な黒の感性』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----